オンライン会話練習プログラム *TalkAbroad* を利用しての異文化学習プロジェクト
Intercultural Projects in Japanese Using the Online Video Chat Program *TalkAbroad*

松永由美子，ハック真理子，コロラド大学ボルダー校
Yumiko Matsunaga, Mariko Hacke, University of Colorado Boulder

1.　はじめに

本研究は以下の三つの研究動機を持って、2018 年に始められた。

１）異文化接触の機会の可能性の追究
２）自律的な学習の機会の可能性の追究
３）TalkAbroad のオンライン教材としての可能性の追究

この研究プロジェクトが最初に行われたのは当校の四年生のコースである。いつも四年生のコースを教えていて驚くのは、学生の教室外での日本語使用範囲・頻度に幅があるということだ。例えば、日本に住んだことがあって日本人の友だちがたくさんいる学生から、教室を出ると全く日本語を話す機会がない学生まで様々である。交流の機会なく四年生まで来てしまうような学生に異文化接触の機会をクラス活動を通じて与えられないか、と思ったのが最初のきっかけである。それから、当校の一番上級である四年生の日本語コースが終わると、その後は自分で日本語学習に対峙していかなければならないが、その準備・橋渡しになるようなものが提供できないか、と言うのが動機の二点目。それから、このような目的を達成するツールとして、TalkAbroad が適当であるか、というのが三点目の動機である。以下、この三点に着目して行ってきたプロジェクトの結果について報告する。それに加え本稿では、プロジェクト開始後に始まった Covid-19 による remote instruction を経た後の、Post-Covid19 の遠隔異文化交流の今後についても考察したいと思う。

2.　先行研究と研究目的

2.1　異文化接触の機会

過去の研究では、Skype や TV 会議システムなどを使った異文化接触の機会が、学習者の日本語学習に対する動機付けを高めたという結果が得られている（神谷 2011；小林＆何 2014；斎藤 2016）。植田（2016）は、海外の日本語学習者と日本語を使って交流する中で、日本人学生が異文化コミュニケーション能力を養成するに寄与したという研究結果を示している。Carruthers（2017）に、“[V]ideo chats with native speakers may positively influence students’ views of the target language, culture, and Spanish-speaking people”とあるように、ビデオチャットを通して学習言語・文化・人に肯定的な影響が与えられたのが観察されている。身近に学習言語のリソースがない場合に、こういったテクノロジーの果たす役割をもっと検証していく必要があると思われる。

2.2　自律的な学習の機会

高橋（2014）の研究では、教室に属さない新しいタイプの日本語学習者を集め、Facebook 上でコミュニティを形成した実験報告がされている。近年、YouTube や SNS を使ったり、インターネットをリソースとして、独学で日本語を勉強する学習者や、既習者・元日本在住者で、現在日本語を話すコミュニティから離れている日本語話者などが増えていると報告されているが、本研究の三年生・四年生はその潜在予備軍と言える。Facer（2017）に、“Students are often at a loss to make sense of their learning processes and to connect their classroom experiences to broad life goals. Understanding their own language learning process will engage students to develop competencies, insights, and experiences that can be applied to lifelong learning beyond the classroom”とあるように、自律学習者として成長する機会を与えることが重要だと感じた。

2.3　TalkAbroad のオンライン教材としての可能性

Wahls et al .（2017）の“Virtual international exchange”というプロジェクトに当日本語科も参加したことがあるが、この時感じたのは、スペイン語がメキシコの大学と交換プログラムを、テキスト・チャットなどから始め、パートナーのマッチアップ、リアルタイムのコミュニケーションまで、同じタイムゾーンにいると言うことから簡単にできたのと比べると、時差があり、日本の大学の前期開始が 4 月半ば、後期が 10 月半ばの日本語の交換プログラムはかなりの状況的困難があった。もう少し簡易に異文化接触の場が得られないか、自律学習の機会を与えられないか、と模索している時に、TalkAbroad について知り、文献を検索すると、Facer（2017）で TalkAbroad の利点が以下のように紹介されていた。

- “[A] positive impact on students’ learning outcomes.”
- “[A] positive and productive experience for students.”
- “A TalkAbroad conversation rather than an ‘exchange’ means that **my students no longer share time conversing in English.**” (Bolding mine)

特に三点目の利点について興味を持ち、私達の目的に TalkAbroad が合致するのか、というのを探るのもプロジェクトの検討点である。

2.4　本研究の質問

このような背景を踏まえて、本研究の質問は以下の二点である。

１）学習者のオンライン会話練習（TalkAbroad）に対する態度とその変化、与えられた課題に対する学習者個々の意識・姿勢の違いを比較・分析する

２）TalkAbroad を使った中上級コースの異文化学習プロジェクトが、本来自発的であるべき異文化コミュニケーションにどう影響を与えているかを実際の会話を使って考察する

以下、１）の質問をアンケートの分析を基に考察し、２）の質問を録音された会話の分析を基に考察する。次の章で、TalkAbroad の簡単な紹介と、それを使った本研究のプロジェクトの説明を行う。

3. TalkAbroad とは？

TalkAbroad（https://www.talkabroad.com/）は、2004 年にスペイン語のプログラムから始められ、現在では、日本語・英語・アラビア語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・中国語・ポルトガル語、合計９言語のプログラムが提供されている。プログラムのアピールポイントとして「居ながらにして異文化交流が出来る」と謳っているが、実際 TalkAbroad を利用して感じた利点は「母語話者の会話パートナーと簡単に会話練習ができる」「会話パートナーは学生の会話相手のためのトレーニングを受けている」「会話パートナーの情報（顔写真・自己紹介）を見て、学生自身で好きな相手を選ぶことができる」「教師はプロジェクト中、学生の進捗がモニターでき、自動録音された会話を聞いて、後で評価・フィードバックできる」と言うようなことが挙げられる。それに対して、欠点は「有料である」「相互寄与タイプの Telecollaboration/Virtual Exchange のように、自発的なプロジェクト後の関係発展の可能性はない」ということである。

4. 過去五年の実践と改善

ここでは、コロラド大学の日本語中上級クラスで 2018 年から現在まで、過去五年間、実践と改善を行ってきた経緯を振り返る。プロジェクト実施コースは、六・七・八学期のコースで、それぞれの使用教材は、六学期で「上級へのとびら」６～１０課、七学期で１１～１５課と生教材、八学期目では生教材のみを使用している。何れのコースも、TalkAbroad は課題のプロジェクトのインタビュー部分で利用している。

2018 年秋学期に初めて七学期目で実践したことを、2019 年の AATJ で報告したが、その時にわかったことは、以下の三点であった。

１）「異文化接触」が「アメリカ文化対日本文化」「アメリカ代表対日本代表」というような構図になっている

２）教科書で学習した話題だと、その話題に関しての語彙も勉強してあるので、学生にとって会話がしやすく、学習したことの確認にもなる

３）日本語が弱い学生ほど教科書に書いてあるフレーズをそのまま会話に使っている傾向がある

これらに対して、以下のような改善を行った。まず１）の傾向に関して、次の学期に「質問をする時は、相手が日本人代表として答えるようにならないようにする。『日本人は・日本人としてどう思いますか／日本人だったらどうしますか』のような質問は避ける」という指示を明記し、インターネットで調べて分かることは自分で調べ、それを基にした会話パートナーの意見などを聞くように促した。

次に、２）の「教科書で学習した話題・知識・語彙が会話に役に立った」と言う点は、中級の学生にはアドバンテージになると考え、今回の研究でデータを収集した 2023 年の六学期目の日本語クラス（３１人）では、課題として「とびら」６～１０課で学習したトピックからテーマを選ぶよう限定してみた。

最後の３）に関しては、「弱い学生が教科書のフレーズをよく使っていた」という点を考慮し、６～１０課までしかカバーしない六学期目のコースでも、１３課の「インタビュー」のモデル会話・スケルトンを利用して、インタビューの始

め方・終り方、インタビューの背景の説明の仕方、フォローアップの質問の仕方などを練習し、準備段階でインタビューのストラテジーの意識化を図るようにした。

このように 2019 年の分析の結果を基に課題のデザインを少し改変し、2023 年３月・４月の二か月を使って準備、ソロ・ペア・三人グループの何れかで３０分のインタビューを実施した。学生は、インタビューの前にまず選んだテーマについて調査し、インタビューの目的の簡単な説明を考え、最初にするいくつかの質問を予め準備した。インタビュー後の成果としては、クラスで口頭発表し、その後レポート提出をさせた。インタビューの前には、インタビューの評価法を説明、インタビュー後の発表・まとめのレポートのタスクの指示にも、「インタビューの内容が分析・結論に反映されているか」と言う指示を含み、インタビューとの関連性を意識付けした。このような課題を学生に与え、後で学生たちの企画書、レポート、アンケート、録音された会話データを分析のために集めた。次のセクションで、まず、アンケートの分析を通して、冒頭で紹介した質問１）に答える。

5. 分析結果

5.1　アンケートの分析

インタビュー実施後、課題の一つとして提出させたアンケートの質問は、2018 年のものから今回の三年生用に変えた箇所もあるが、基本的に同じ質問と選択肢を用意した。主な質問は以下の五つである。

１）インタビューの大きなテーマは何か
２）なぜそのテーマを選んだのか（複数回答可）
３）インタビュー前に期待していたことは何か（複数回答可）
　　インタビューはどうだったか
４）普段日本人と話す機会はどのくらいあるか
５）TalkAbroad についてどう思うか（複数回答可）
　　会話パートナーの日本語母語話者はどうだったか

まず、１）の質問に関して、2018 年の七学期目のコースのプロジェクトでは「日本に関係するトピック」としか指定がなかったので、前回と今回の 2023 年を簡単に比較はできないが、インタビューの大きなテーマとして「日本文化」を選んだ人が多く（47%）、今回も「日本のポップカルチャー」を選んだ学生が半数ぐらいいた（48%）。

２）「なぜそのテーマを選んだか」と言うのは、前回も今回も「興味があったから」と言う回答が一番多かった（88%・90%）。前回と違うのは、今回「インタビューしやすいと思った」と言う選択肢を選んだ学生が多かった点だ（12%・61%）。

３）の「インタビュー前に期待していたこと」は、どちらも「楽しく会話する」が多かったが（71%・84%）、前回「上手にインタビューする」ことを期待していた人が 29%なのに対して、今回は四分の三の学生（74%）が「上手にインタビューする」ことを期待していた点が違っている。３）の質問のフォローアップ、「インタビューはどうだったか」と言う質問に対して、前回の学生のほうが厳し

く自分のインタビューを評価しているのが意外であった。今回は「良くも悪くもなかった」と答えた学生が一人いただけであるのに対して、前回は「良くなかった」と答えた学生が二人いた。ただ、この二人の学生は問題のあったペア同士で、自分達のペアワークへの問題から否定的な評価をしていた。更に、今回「どうしてそう（インタビューの出来について）思うか」と別途記入してもらったが、以下のように、インタビューの出来について肯定的な答えを残した学生は、「安心できた」「話しやすかった」と会話相手をほめている人が多かった。

- "It went very well mainly because I was so nervous beforehand. [K]-san really **made us feel comfortable and provided a safe space where we didn't feel judged if we made mistakes**. **When we got stuck, she always tried to help us**. [K]-san really made an effort to make sure we understood and further explained if we didn't know." (Bolding mine)
- "**I felt comfortable** forming questions off the top of my head, and **was not worried about** sounding dumb since **I knew she would help me in any errors or misunderstandings I had**." (Bolding mine)

一方、否定的なコメントが見られた学生、そしてたった一人の「良くも悪くもなかった」と答えた学生は「準備不足」「自分の期待値に自分のパフォーマンスが及ばなかった」と言う理由で、会話相手ではなく自分サイドの問題で否定的な評価をしていたのが多かった。

- "**We needed to prepare more** and personally I felt like **I froze up** in the moment. **I forgot a lot of the prep I did and scrambled** as a result. I could have held my composure more. Overall it was still enjoyable but **I did not perform to my own expectations**." (Bolding mine)
- "**We originally chose a very specific topic which made the answers of the interviewee harder to understand**, but as the interview went on we started asking more questions about things we covered in class more specifically and in those cases it felt very natural and easy." (Bolding mine)

この二つのコメントを書いた学生はペア同士で、次の会話の分析部分で、この二人の否定的なコメントにつながった原因を考察する。

質問４）「普段日本語をどれぐらい話すか」に対する回答は、七学期目の学生と比べると、今回の六学期目の学生のほうが、教室の外で話さない学生が多いのがわかった（29%・42%）。ただ、その要因の一つに、Covid-19 で、この段階まで留学に行く機会がなかったことも影響しているのではないかと思われる。

質問５）の「TalkAbroad についてどう思うか」に対しては、「いい経験になったけど大変だった」という肯定と否定を同時に感じていた学生もいたが、概ね肯定的なコメントを書いた学生が多かったと言える。今回は、フォローアップとして「会話パートナーの日本語母語話者はどうだったか」聞いた。一人を除いて全員「話しやすかった」と答える中、一人「話しにくかった」という選択肢を選んでいる学生がいて、TalkAbroad の日本語パートナーは学生が話しやすいように相手のレベルに合わせて話しているのが、オーディオを聞いていてもわかるので、目を引いた。その学生のコメントによると、

- “[I]n the case of the interview it went great, however **I myself felt confined to the questions I made not because of the interviewee** but I felt that my skills were very low.” (Bolding mine)
- “It was nice to try to have a conversation, but **it was extremely stressful for me leading up to the interview**. I even pushed back the interview because I felt unprepared. I felt that it was challenging to figure out what to say during the interview that I hadn't prepared for. Overall, it felt like a fun experience that was difficult and **that difficulty produced large amounts of stress**.” (Bolding mine)

話しにくかったのは相手のせいではないと書いていて、この学生にとってはこの課題で母語話者と話すこと自体が大変だったのがうかがえる。以下の会話の分析で、この学生が”extremely stressful”と感じた原因についても考察する。

ここまで、アンケートを使って、本研究の質問１）「学習者のオンライン会話練習（TalkAbroad）に対する態度とその変化、与えられた課題に対する学習者個々の意識・姿勢の違いを比較・分析」した。分かったことは以下の四点である。

１）2018 年秋学期（七学期目）と 2023 年春学期（六学期目）のアンケートの回答の傾向は似ている
２）どちらも、基本的に肯定的な回答が多かったが、今回のほうが更に肯定的な回答が多かった
３）最初は不安や緊張を感じていたが、インタビューを通して、それがなくなって行った学生が多かった
４）六学期目の学生のほうが、教室外で日本人と話す機会がない人の割合が多かった

次のセクションで、会話データの分析を行い、質問２）に答える。

5.2　会話の分析

アンケートでほとんどの学生が肯定的に回答した中、否定的な評価をした学生の原因となるものを、二組の会話を使って考察してみる。まず、アンケートで、会話パートナーについて「話しにくかった」とたった一人答えた学生のインタビューを書き起こして分析してみた。以下は、そのインタビューの冒頭であるが、学生がインタビューの目的を紹介した後、続けて「日本人はあまり宗教を持っていないと聞くがどうしてか」と言う大きな質問をする。

例１（学＝学生・パ＝会話パートナー）

学：今日は日本の宗教について色んなインタビューさせて頂きます。よろしくお願いします
パ：よろしくお願いします
学：ああ、ではインタビューを、始めさせていただきます。ああん。はい
<u>日本人はあまり宗教を持っていないと聞いておりますが、それはどうしてですか</u>
パ：ああ、どうしてでしょうかね、確かに。あのう、なんでですかね、難しいですね。あの、私は神道とあの仏教、なんですけど、あの、なんでかな、あんまりその、神様にお願いするっていう、習慣はない、ですね。なんか神様よ

りも、あの、なんてんだろう、**先祖？**、あの、家族のおじいちゃん、おばあちゃんとか、そのまた大おばあちゃん、大おじいちゃんとか、あの、**先祖の墓参り**をするとか、の行事がまあまあなんか伝統的に残ってるから、あの神様になんか、あの、キリスト教ってなんかその神様っぽい感じ。あと、他の宗教ってなんか神様、神様に何かお願いしたりとか、神様になんかお祈りしたりするけど、あの、日本って結構家族？のことを思うことが多いから、だからかな。だから、そういうなんか神様寄りではないんじゃないかなって思います

学：うん

パ：うん

学：**面白いですね**。あー

パ：難しい。でもなんか、でも神社は、神社は、その神道ってか、神社は、まあ何でも自然の山とか、その土地とかには神様がいるみたいな、考え方だから、まあわかんないです。どうしてかな？はい、難しいですね。うん

学：あー（パ：うんうん）**日本の宗教は何がありますか**

会話パートナーにとって、あまり想定していなかった質問だったようで、自然な答えを丁寧に１分２０秒答えている。「先祖」「墓参り」などの単語や、この回答内容に似た情報が６課の読み物で紹介されているので、理解できない内容ではなかったはずであるが、会話パートナーの言い淀みや言い直しのせいで、かなりこのレベルの学生にとっては理解するのが難しかったと思われる。その後、「面白いですね」と学生が反応できたのは素晴らしかったが、続けて「あー」と次の質問を始めようとすると、会話パートナーが更に答えを追加し、その後、改めて学生が次の質問を始めるが、その質問も「日本の宗教は何がありますか」と質問の背景がよく分からない大きな質問で、それに対する会話パートナーの答えも同じように長くなっている。この後もこのような質問・答えの繰り返しになって行き、学生が”extremely stressful”と感じた原因の一つは、質問の仕方であると言えるだろう。

次に、アンケートの「インタビューはどうでしたか」の質問に「良くも悪くもなかった」とたった一人答えた学生と「質問が specific すぎて回答が理解しにくかった」と答えたペアのインタビューを見る。まず、インタビューの最初に「私達のトピックは、日本とアメリカのメディア中の演技です」と、自分のインタビューのテーマを説明し、「どんな映画やメディアを見ますか。どんなアニメが好きですか」と、自分達の予定している質問を聞く前に相手の背景を探っている。そして、会話パートナーが良く見るメディアの中の「演技はどう思いますか」と質問した所までは流れがスムーズであった。その後「韓国ドラマの方が日本よりクオリティが高い」という会話パートナーの回答へのフォローアップの質問が、学生がアンケートで書いていた“specific”、分かりにくい質問になっている。

例２（学＝学生・パ＝会話パートナー）

学：はい。ああ、その、そのドラマと、韓国のドラマの中で、**気持ちの表し方**

はどう思いますか？

パ：あー、気持ちの表わし方、うん。気持ちの表し方、難しいですね（学：うん）えっと、そうですね。気持ちの表し方は、えっと、気持ちの表し方はなんか似てると思います。あの韓国と日本で。ただ、その、発言？気持ちを表す発言が、えと、日本より韓国の方が、あの、なんて言うんだろう？**詩のような感じ。詩のような感じ**、あの、とか、あの何て言うんだろう？日本だったら言わないような、なんかあの、例えとか、その、うん、言うかな（ポーズ）うん、難しいですね（笑）

学：**韓国のドラマ**、あー、**を見るときに**、（パ：うん）あ、演技は、と自分の気持ちを、えー、**どんな気持ちを**、あー、する、**するんですか？**

パ：**あ、どんな気持ちになるか？**

学：うん、はい

パ：えー、もう、すごく、あの、感情移入ができる、ぐらい、演技が上手だと思います。なんか、その人の立場になれる、感じがします。

最初の質問「韓国のドラマの中で、気持ちの表し方はどう思いますか」に対して、パートナーが二回「難しいですね」と言っているように、答えも長く「詩のような感じ」と、表現も分かりにくくなっている。その次の質問は、動詞がはっきりしなかったため、会話パートナーが「どんな気持ちになるか？」と質問を推測して答えている。その回答も「感情移入」「その人の立場になれる」など難しい表現が使われている。この後も少し分かりにくい質問が続き、それに応じてパートナーの答えも難しくなり、その答えを学生が理解するのに苦労するのが続いていく。これがアンケートの”I forgot a lot of the prep I did and scrambled,” ” We originally chose a very specific topic which made the answers of the interviewee harder to understand”と言う感想になる原因ではないかと思われる。例１同様、質問と回答を理解する能力のバランスが合っていないのが問題となっている。しかし、他の学生が「うまくできた」と答えたインタビューの方がスムーズで、いいインタビューだったとも言えない。常時単純な質問に終始したり、会話パートナーに話をさせて、自分達は質問をするだけという、チャレンジのないインタビューもあった。ここで紹介した二つの事例のように、質問が大き過ぎたり、分かりにくくて双方が苦労していても、インタビュー自体が失敗だったとは、オーディオを聞く限り感じなかった。一方で、学生がストレスに感じたり、インタビューが上手く行かなかったと感じたのは理解でき、この点に関してはクラスでの準備段階で何かインタビューのサンプルを聞かせて、話し合ったりできないかと考えている。

本研究の質問の２）「TalkAbroad を使った中上級コースの異文化学習プロジェクトが、本来自発的であるべき異文化コミュニケーションにどう影響を与えているかを、実際の会話を使って考察する」と言う点に関して、上手く行ったというインタビューもそうでなかったというインタビューも、この課題自体の形式によって制限されている部分が会話部分で見られた。

１）聞き手／話し手と言う構造が固定しやすく、質問をし、相手の回答を聞くだけの会話になりがち

２）一方でタスク（インタビュー）があるので、このレベルの学生でも３０分の会話が成り立っている。ある程度準備をすることで、最終的には成功体験につながっている

３）日本語力が上がるにつれ（七・八学期）、インタビューという形式でも、自然に会話ができていることから、中級後半の学生への異文化体験としてのいい「入り口」になっているのではないか

最後に、本稿のまとめとして、Covid-19 を経て、今後の TalkAbroad の異文化交流への活用について考察する。

6. まとめ：Covid-19 を経て、今後の遠隔異文化交流について

冒頭に書いたように、TalkAbroad の研究プロジェクトは Covid-19 以前から、異文化接触の機会のない学生に、将来の異文化接触への橋渡しにならないか、と言う動機で始めた。Covid-19 中、そして Covid-19 後に感じた利点、今後の方向性などを最後に少し考察したい。

Covid-19 中・後のプロジェクト実施状況としては、まず 2020 年 3 月にキャンパスが突然閉鎖になり、すべての授業がリモートになっても、問題なくインタビューが続けられたのは大きい利点だった。更に、Covid-19 中の学生のアンケートに「イベントや人が集まることが制限された中で、TalkAbroad で日本人と話せるのは新鮮だった」と書いた学生がいたことからも、遠隔異文化交流の可能性を感じさせられた。このプロジェクトは「四年生の最後のクラスが終わった学生の自律学習に対する刺激にならないか」と考えて始められたのだが、他にも「自分は恥ずかしがり屋で、自分から日本人の友達が作れないし、八学期目が終わった後、日本人の友だちを作れる自信がない。ただ、こういうツール (TalkAbroad) で、日本語の会話の練習を続けたいと思う」「一番難しかった課題は TalkAbroad だったけど、一番いい経験になったのも TalkAbroad だった」というコメントを見て、TalkAbroad を使った遠隔異文化交流への手応えを感じさせてくれた。Post-Covid 19 下では、リモートでコミュニケーションするのが普通になり、TalkAbroad の会話も学生にとって普通のモードになった。日本語母語話者と話すことに緊張しても、リモート会話自体に緊張することがなくなったという点が見受けられ、それも”new normal”と言えるかもしれないと感じた。人と人が直接会えるようになっても、まだ遠隔で交流し、外国語学習・異文化交流をする利点があるのか、と言う疑問もあると思うが、post-Covid19 下でも遠隔異文化交流の利点を説く研究者は多くいる。例えば、Altstaedter（2023）は以下のように、遠隔異文化交流の利点を主張している。

> “Given the low numbers of U.S. students studying abroad in general, and specifically of students from underrepresented groups, it becomes imperative to seek alternative ways to provide international experiences to a larger number of students. **International virtual exchange learning experiences, or telecollaborations, can help address this disparity and bridge the access gap so that more L2 learners can have the opportunity to develop their L2 language proficiency and intercultural competence as they interact with members of the target culture in real contexts**.” (Bolding mine)

このように、遠隔異文化交流は、post-Covid19 下でも、対面では出来ないことが実現出来る可能性を示している。今後も異文化交流のバリエーションとして続いて行くのではないかと思う。TalkAbroad が異文化交流よりも、言語能力の向上に最大限の目標を置いている傾向が高いと感じさせられることもあるが、これからも実施プロジェクトの改善をしながら、学生の異文化交流への橋渡し・将来の異文化接触へのトランジションを目的に、継続して行こうと考えている。

参考文献

植田栄子（2016）「インターネット（スカイプ）を用いた日本語による日本人学生と日本語学習者とのオンライン交流の分析」『信学技報』116, pp.7-12.一般社団法人電子情報通信学会

神谷英理（2011）「日本語学習者による TV 会議システムを用いた日本人母語話者へのインタビューとその後の日本語学習者の変化」『日本語教育方法研究会誌』Vol.18 No.1. NII-Electronic Library Service.

齋藤郁恵（2016）「日本人とのオンライン交流が海外日本語学習者に与える影響－中国内陸部で学ぶ大学生の動機づけの変化から－」『南山言語科学』11, pp.39-58.南山大学

高橋敦（2014）「グローバルネットワーク時代における『新しい日本語学習者』とオンラインコミュニティへの需要」『桜美林言語教育論叢』10, pp.139-156. 桜美林大学言語教育研究所

Altstaedter, L. (2023). Telecollaboration and Virtual Exchange. The Language Educator, 18 (1), pp.18-22.

Carruthers, H. C. (2017) “Students’ Experiences During Cross-Cultural Video Chat Interactions” The proceeding of Central States Conference on the Teaching of Foreign Languages: Performance + Proficiency = Possibilities. chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED598262.pdf (August 31, 2023)

Facer, B. R.（2017）”Tech Watch Tips from Educators: The Latest in Language Learning Technology.” The Language Educator, Jan/Feb.

Wahls, N., Méndez-Betancor, A., Brierley, M., Pinzón, V. A., Matsunaga, Y., Bocanegra, N., and Vidaurrázaga M. B. 2017. “Collaborative Learning in Global Online Education Using Virtual International Exchanges.” EDUCAUSE Review. https://er.educause.edu/articles/2017/9/collaborative-learning-in-global-online-education-using-virtual-international-exchanges (August 31, 2023)